

## SAP を用いて血糖管理を行った糖尿病合併妊婦の 1 症例

◎村越 大輝<sup>1)</sup>、大石 祐<sup>1)</sup>、久住 裕俊<sup>1)</sup>、平松 直樹<sup>1)</sup>  
地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院<sup>1)</sup>

【はじめに】糖尿病合併妊婦における血糖管理は母児合併症予防のために重要である。そのため、妊娠中の血糖管理目標は厳格な基準が設けられており、妊娠前から血糖管理をすることが求められている。しかし、1型糖尿病合併妊婦では、重症低血糖などの不安定な血糖変動を示すことが多く問題となりやすい。Sensor Augmented Pump(SAP)療法は、連続的なインスリン注入と皮下間質液中グルコース濃度の測定が可能であり、2018年4月よりグルコース値の変動を予測し、基礎インスリン注入を停止させる Low Glucose Suspend(LGS)機能が搭載された。今回、妊娠前より SAP を使用し血糖管理を行った症例を経験したので報告する。

【症例】30歳で1型糖尿病を発症、インスリン強化療法(MDI)にて血糖コントロールを行っていたが、HbA1c9%前後とコントロール不良であった。34歳で挙児希望があり、当院紹介となりSAPを導入した。SAP使用から半年後にLGS機能付きSAPに切り替え、その1ヶ月後に妊娠した。

【経過】初回外来時のHbA1cは8.8%だったが、SAP導入後からHbA1cは徐々に低下し、妊娠成立時は6.3%であっ

た。また妊娠期間中に測定していたGA%は経時的に低下が認められ、出産時は15.1%であった。妊娠前のHbA1cの平均は7.1%、低血糖頻度(70 mg/dL未滿)の平均は23.3回/月だったのに対し、妊娠中のHbA1cの平均は6.2%、低血糖頻度の平均は9.9回/月であった。第37週3日に母児合併症無く、3292gの児を出産した。

【考察】妊娠初期の血糖管理は児の器官形成にとって重要であり、妊娠前より血糖管理を行うことがリスク軽減に有効である。本症例では妊娠直前にLGS機能付きSAPに切り替えができたことにより、妊娠中の低血糖頻度が大幅に軽減された。また、妊娠中期から後期にかけて胎盤から産生されるTNF- $\alpha$ などの影響により、インスリン抵抗性が増大するが、SAPを用いて管理をすることで、厳格な血糖管理が達成できたと考えられる。

【結語】糖尿病合併妊婦は厳格な血糖管理が求められるが、SAPを有効に使うことで十分に達成可能であり、良い選択肢の一つであると考えられる。

連絡先：054-247-6111（内線2254）